

「人を殴るのは、悪いこと。」

新型コロナウイルスの新規感染者数が嘘のように急減し、マスコミの関心は総選挙の方に移ってしまった。選挙戦でもコロナのことが論じられてはいるものの、切迫感がない。感染症の専門家もテレビに登場する機会が随分と減っている。たまたに登場すると、第六波に備えよというばかり。いかにも説得力を欠いた話である。新規感染者がこれほどまでに急減し、しかも急減の原因は不明だといいながら、他方で再拡大の恐れがあるから次に備えよ、というのはどういふことか。いま必要な言説は、長期のストレスですっかり萎縮してしまった国民の心身をいかにして癒やすかにあるのではないのか。

このところ、凶悪な事件が全国で相次いでいる。机の脇におかれている新聞に目をやれば、この十月月十三日には愛媛県で、翌日には甲府市で、十五日には東京上野駅で未知の人物が二人の男性に刃物で切りつける、といった事件のことを報じている。

継続的に起こるこれらの事件は、長らくつづいた陰鬱なコロナ禍の社会状況と何か関係があるのかも

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総経理事顧問などを歴任(二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職)。

しれない。人間には、外部からのストレスに心身の状態を適応させ、心身の恒常性を保つメカニズムが備わっている。これがハンス・セリエのいうホメオスタシスだが、強度のストレスがさらに長期にわたって継続すると、このメカニズムが毀損され、ホメオスタシスが崩壊することがある。いわゆる疲弊である。

かつて仮面ライダーの主演をしていた藤岡弘、氏が、いかつい顔でがっしりと腕を組む姿を写したポスターが、私が利用している東急池上線の小さな駅の壁に貼られていた。藤岡氏を真ん中に、左右には「人を殴るのは、悪いこと。大の大人に、言うことじゃないよな。」と書かれてある。鉄道事業者共同の暴力行為防止ポスターである。駅や列車内における駅係員や乗務員等への暴力行為、乗客同士のトラブルが頻発しているらしい。

日本の社会が疲弊期から脱出するにはまだしばらくの時間を要するのであろう。感染症の専門家ではなく、心理学や精神医学の専門家の出番ではないか。